大特集・バンク、まえがき

金を借りるのがムズカシイ 金のアッテは血まで売る

バンク――今の社会の縮図

そいゃみじめで悲惨なもんだ、という言を用意しておいて「バンクとは何か」なんて峻刻ぶって問うてみたりするバカがいる。

売血なんて非人間的な、献血制度に、と絶叫する自称革新というバカがいる。

おれたちにとっちゃ、ただ生活の一部にすぎない。恥でもないし、イキがったりすることでもない。

ただ金かものをいう今の社会の一部なのだ。

それを何故こんな大特集にしたのか。それは一一ページからの〈証言〉で仲間・駒さんが訴えているように「なぜ黙って生命の大安売りをしてへさせられて」いくのか」考えて見ようということだ。

バンク――銀行なんかじゃない

「銀行とはお金の足りない人がお金を借りられるところです」――今の学校はこんな大ウソを教えている。おれたちに貸してくれるのだろうか？　あれは、金持ちだけが借りたり殺したりできるところなのだ。

同じように、血を流しても「献血」してもらえるさ」と金持ちは考えるが、「あァ売ったらなんぼになるかなァ」なんて思ったりしながら死んでいく者がいるのだ。ちがうのだ。

バンク――それは流れ者の墓場

ちょっと前までは血を売っているのがいた。今の京橋は秋らない。男ばかりだ。

「食うため、生きるために仕方がないじゃないか」とヤケおこしてるうちに、逆に生命をちぢめていく、それが吸血バンクだ。

☆　☆

港湾労働者、中野さん、それに日雇、一木さん、東京拘置所に囚われの身の駒さん、三人の仲間の証言をまずきこう。次に、バンクのエライさんが、実は、中国への侵略戦争のとき生体解剖なんかやった責任者だという事実、……あとは読んでからのお楽しみ。

また特集するので感想をきかせて下さい。

☆　☆

「前はなァ人間の血ィやったけど今はブタの血ィで口紅つくるんや。すのこみたいなんの下にしいてブタを殺して、下にたまった血を東京へ冷凍車で運ぶんや」――大津市陽でデッチしてたとき兄キが教えてくれたこのコトバ、阿倍野の方へ行ったりして、きれいな女のネエチャンや男のネエチャンの毒々しい口紅みるたびに思い出す。ベルージュ哀しや唇かめば、闇の夜風も泣いて吸く、こんな女に誰がした――　嗚呼アンコは血まで売る。